岡山県立図書館

# 児童図書研究室だより

平成 26 年 3 月14日　発行　　Vol.15

## 2013 年度　国内子どもの本に関する賞

| 賞 | | タイトル | 著者 | 出版社 | 出版年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 日本絵本大賞 | 大賞 | オオカミがとぶひ | ミロコマチコ／著 | イースト・プレス | 2012.8 |
| | 絵本賞 | しげるのかあちゃん | 城ノ内 まつ子／作、大畑 いくの／絵 | 岩崎書店 | 2012.7 |
| | | シルクハットぞくはよなかのいちじにやってくる | おくはら ゆめ／作 | 童心社 | 2012.5 |
| | | ともだちできたよ | 内田 麟太郎／文、こみね ゆら／絵 | 文研出版 | 2012.9 |
| | 読者賞 | しろくまのパンツ | tupera tupera／作 | ブロンズ新社 | 2012.9 |
| 坪田譲治文学賞 | | きみはいい子 | 中脇 初枝／著 | ポプラ社 | 2012.5 |
| 講談社出版文化賞 | 絵本賞 | さがしています | アーサー・ビナード／作、岡倉 禎志／写真 | 童心社 | 2012.7 |
| 産経児童出版文化賞 | 大賞 | タマゾン川～多摩川でいのちを考える～ | 山崎 充哲／著 | 旬報社 | 2012.7 |
| | JR賞 | ゆうだち | あき びんご／作 | 偕成社 | 2012.6 |
| | 美術賞 | 神々の母に捧げる詩～アメリカ・インディアンの詩 続～ | 金関 寿夫／訳、秋野 亥左牟／絵 | 福音館書店 | 2012.11 |
| | 産経新聞社賞 | まぼろしのノーベル賞～山極勝三郎の生涯 | 神田 愛子／著 | 国土社 | 2012.3 |
| | フジテレビ賞 | 願いのかなうまがり角 | 岡田 淳／作、田中 六大／絵 | 偕成社 | 2012.6 |
| | ニッポン放送賞 | さがしています | アーサー・ビナード／作、岡倉 禎志／写真 | 童心社 | 2012.7 |
| | 翻訳作品賞 | 木の葉のホームワーク | ケイト・メスナー／著、中井 はるの／訳 | 講談社 | 2012.1 |
| | | ぼくとヨシュと水色の空 | ジーグリット・ツェーフェルト／作、はたさわ ゆうこ／訳 | 徳間書店 | 2012.11 |
| 椋鳩十出版文化賞 | | 山の子みや子 | 石井 和代／著、稲田 善樹／絵 | てらいんく | 2012.5 |
| 日本児童文学者協会賞 | | チャーシューの月 | 村中 李衣／作、佐藤 真紀子／絵 | 小峰書店 | 2012.12 |
| 日本児童文学者協会新人賞 | | 糸子の体重計 | いとう みく／作、佐藤 真紀子／絵 | 童心社 | 2012.4 |
| 日本児童文芸家協会賞 | | 世界の果ての魔女学校 | 石崎 洋司／作、平澤 朋子／絵 | 講談社 | 2012.4 |
| 児童文芸新人賞 | | 逢魔が時のものがたり | 巣山 ひろみ／作、町田 尚子／絵 | 学研教育出版 | 2012.7 |
| 小学館児童出版文化賞 | | 狛犬の佐助～迷子の巻～ | 伊藤 遊／作、岡本 順／画 | ポプラ社 | 2013.2 |
| | | しごとば～東京スカイツリー～ | 鈴木 のりたけ／作 | ブロンズ新社 | 2012.4 |
| 福島正実記念SF童話賞 | 大賞 | 声蛍 | 万乃華 れん／作、丹地 陽子／絵 | 岩崎書店 | 2013.9 |
| ひろすけ童話賞 | | あまやどり | 市川 宣子／作、陣崎 草子／絵 | 文研出版 | 2012.7 |
| 小川未明文学賞 | 大賞 | 木かげの秘密 | 浅野 竜／作 | 学研教育出版 | 2013.12 |
| 野間児童文芸賞 | | ルドルフとスノーホワイト | 斉藤 洋／作、杉浦 範茂／絵 | 講談社 | 2012.11 |
| けんぶち絵本の里大賞 | 大賞 | クロコダイルとイルカ | ドリアン助川／作、あべ 弘士／絵 | メディア・パル | 2013.3 |
| | びばからす賞 | おかあちゃんがつくったる | 長谷川 義史／作 | 講談社 | 2012.4 |
| | | メガネをかけたら | くすのき しげのり／作、たるいし まこ／絵 | 小学館 | 2012.1 |
| | | うちは精肉店 | 本橋 成一／写真と文 | 農山漁村文化協会 | 2013.3 |
| | アルパカ賞 | さわるめいろ | 村山 純子／著 | 小学館 | 2013.2 |
| ニッサン童話と絵本のグランプリ | 童話の部優秀賞 | わけありリンゴのアップルパイ | あさい ゆうこ／作、あべ まれこ／絵 | BL出版 | 2013.12 |
| | 絵本の部大賞 | ゆみちゃんはねぞうのわるいこです | みやざき あけ美／作・絵 | BL出版 | 2013.12 |

2013 年の国内の主要な児童文学賞で、当館に所蔵している本をまとめました。児童図書研究室にて 3 月 18 日（火）から 5 月 18 日（日）まで『2013 年主な児童文学賞受賞作品』を展示しています。ぜひ、手にとってご覧ください。

岡山県立図書館10周年記念

# 「NHK おかやま朗読ひろば」公開録音を行いました

平成２６年１月１１日（土） 岡山県立図書館２階多目的ホールにて、NHKと「開館１０周年記念　NHK おかやま朗読ひろば」を共催しました。こどもの部とおとなの部の二部構成で、岡山県出身作家の作品をNHKアナウンサーが朗読しました。

こどもの部では、『絵本おかやまのむかしばなし』より「ももたろう」、坪田譲治の『きつねのさいころ』、重松清の『あいつの年賀状』を取り上げました。参加した子どもたちは、静かにアナウンサーの朗読に聞き入っていました。その後、「子どもに本を楽しんでもらうには？」というテーマで、当館職員とNHKアナウンサーとのトークコーナーがあり、年齢に応じた絵本の選び方を紹介したり、家庭での読み聞かせで困っていることなど、会場からの質問に答えたりしました。

おとなの部では、あさのあつこの『バッテリー』、坪田譲治の『母ちゃん』、小川洋子の『銀色のかぎ針』、そして小手鞠るいの『婚約指輪』を取り上げました。朗読体験コーナーでは、時折笑いも起こり、楽しい雰囲気で行われました。また、アナウンサーの朗読のＢGMとして、ギターの生演奏が入り、参加者は、物語の世界に引き込まれて聞き入っていました。今回のイベントでは、朗読する作品の選定、当館の貴重書庫に保管している「ももたろう」の原画展示、作家の紹介パネルの作成・展示を当館職員が担当しました。

なお、このイベントの様子は、平成２６年１月２６日（日）８：０５～８：５５にラジオNHK第１（岡山県域放送）で放送されました。

# 布絵本のおはなし会を催しました

２月１５日（土）と２２日（土）の２日間にわたり、布絵本のおはなし会をしました。今回は多くの赤ちゃん連れの親子や布絵本の作成に興味をもっている方など、幅広い年齢層の方が参加してくださいました。今回は、『じゃあじゃあびりびり』、『いないいないばあ』、『たまごのあかちゃん』そして、『きんぎょがにげた』の４つの布絵本を読みました。『たまごのあかちゃん』は、いろいろな動物の卵から、かわいらしいあかちゃんが生まれてくる話です。「でておいでよ」の声に合わせて、読み聞かせに参加している子どもたちに紐を引っ張ってもらうと、中からヒヨコやカメや恐竜の赤ちゃんが生まれてきました。この布絵本は、紐を引っ張って出すという行為や何が出てくるかという期待感が子どもを楽しませているのだと感じました。そしておはなし会が終わった後も、ゆっくりと親子で展示してあった本を興味深く見たり触ったりしていました。

紙で作られた本が馴染み深いですが、布絵本のよさとは何でしょうか。まず、素材が柔らかく、温かみがあり、小さい子どもでも安心して触ることができるということではないでしょうか。紙で指を切ったり本が破れたりという心配がなく、素材の感触を楽しむことができます。また、子どもに合わせて、柔軟に本を楽しめるよさもあると思います。

布絵本の中には、ボタンや紐結び、ファスナーなどついているものがあります。「上手にボタンがはめられたね。」「紐を引っ張ると、こんなものが出てきたね、びっくりだね。」など、子どもに合わせて自由なやりとりをしながらお話を進めることもできます。

県立図書館では、ボランティアが週に１回集まって布絵本を作成しており、１年間におよそ１個の新作が出来上がっています。今年度は『ピクニック』です。思わず食べてしまいそうなハンバーガーやお弁当セットが布絵本になっています。この本を使っておままごとができそうです。

布絵本のおはなし会は、年に一度開催していますので、ぜひ、機会があれば参加してみてください。また、布絵本は児童資料コーナーにおいてありますので、気軽に触って楽しんでください。

児童図書研究室展示

# 昔話の読みくらべ

１月２１日から３月１６日まで、児童図書研究室にて昔話の読み比べの展示を行いました。みなさんも幼少期に「むかしむかしあるところに・・・」と聞いたことがあるのではないでしょうか。昔話は口伝えをされてきた文芸です。昔はテレビもラジオもなく、家族で話すことが団欒でした。おじいさんや、おばあさんが山仕事で怖い目に遭った話や、畑に出てきた狐の話など、実生活の中でのことが話されました。それに加え、実話なのか、作り話なのか分からない話や、年寄りから聞いた断片的な話なども語られました。

また、語る大人は子どもにも分かりやすいように話すので、自然と語り口は単純明快になっていきました。頭のなかで想像しやすいように人物が登場するときには必ず一人で出てくるし、繰り返しの場面は、同じ言葉で語られます。こうして、昔話の語り口ができあがっていきました。

今回は「かちかちやま」、「うらしまたろう」そして「したきりすずめ」の３つの話の読み比べ展示をしています。このうち、「かちかちやま」と「したきりすずめ」は、残酷昔話とみなされることがあります。残酷をどう捉えるか難しい問題ですが、読み比べていくと、絵本によって、残酷と判断した場面を抜いたり、話を変えたりということがあることに気づきます。

例えば、『かちかちやま』では、農作業をしていたおじいさんを馬鹿にしたタヌキを縛り上げ、おじいさんは、タヌキをタヌキ汁にしておくようにおばあさんに言いつけて出かけます。その後の展開が絵本によって異なります。「たぬきは、おばあさんに化けて、おじいさんにおばあさんで作った『ばあさん汁』を食べさせる」場合や、「たぬきは、杵でおばあさんの頭を叩いて、『たぬき汁など誰がなるべ。』と言って山へ逃げてしまう」場合などがあります。

『したきりすずめ』では、糊を食べてしまった雀の舌をおばあさんが切ってしまい、雀は逃げてしまいます。その雀をおじいさんが探しに行く場面の後の描かれ方が本によって異なります。探しに行った先で出会った人に雀の居場所を尋ねていくのですが、尋ねた相手は、おじいさんに向かって課題を出し、それを達成すると教えるのです。「馬や牛、菜っ葉の洗い汁を飲んだら教えてあげる」場合や「土のだんごを食べたら教えてあげる」と言う場合があります。

このように同じ話なのに、話の内容が異なってくるのは、昔話の残酷性をどう捉えるかによると考えられます。昔話の中には確かに、残酷と思えるような話があるかもしれません。しかし、昔話は残酷な場面を描きますが、場面そのものが強調されているのではなく、その背後にある意味や、昔話の語り示そうとしている内側の情報のほうに力点がおかれています。例えば、腕を切ったり、人を食べたりする場面が出てきた際、事実を淡々と語り、どんなふうに切られ、食べられたかというように決して具体的に、残虐的には語りません。また、昔話から「残酷」な場面を取り除いてしまうなら、人間や生き物が生きてきた自然のありようを無視し、文学的魅力を失うという意見もあります。残酷な場面は、人間が成熟していくのに必要な事柄を語り、その昔話を通して、子どもたちは、将来の厳しい現実に立ち向かう心の準備をする機会を与えてもらっているとも考えられます。テレビやゲームが普及し、「語る」という団欒がなくなってしまった今、昔話を残していく、語っていく意味を深く考えさせられます。

〈主要参考文献〉


- 『昔話とは何か』小澤俊夫／著　小澤むかしばなし研究所　2009.4
- 『こんにちは、昔話です』小澤俊夫／著　小澤むかしばなし研究所　2009.10
- 『昔話と昔話絵本の世界』藤本朝巳／著　日本エディタースクール出版部　2000.9
- 『子どもに伝えたい昔話と絵本』藤本朝巳／著　平凡社　2002.　　他


## ◇◆◇イベント情報◇◆◇

# ヨムヨム春のおはなし会

春のおはなし会を開催します。絵本の読み聞かせと工作を計画しています。親子でぜひ、ご参加ください。

◆平成２６年４月 20 日（日）14：00～15：30（受付開始　13：30）

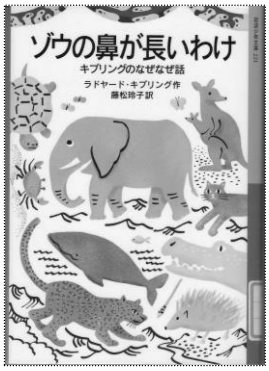
◆岡山県立図書館２階　多目的ホール

◆先着　40 名（保護者同伴可）◆事前申込み不要　　◆入場無料

# 新着図書紹介

## 『走れ！移動図書館　本でよりそう復興支援』鎌倉幸子／著　筑摩書房　2014.1

シャンティ国際ボランティア会で働く著者は、東日本大震災発生後、ボランティアとして何ができるか、それを探るために被災地を訪れました。避難所を回りながら情報を集めていく中で、ダンボールに入れられたままの本をたびたび目にしたり、被災者から本を読みたいという声を聞いたりしました。このことから、移動図書館で被災者を支援していくことに決まりました。本書は、その活動の立ち上げから現在までの活動状況を記録したものです。移動図書館の活動を通して、本が人々を元気づけるなど、本の力について考えることができます。

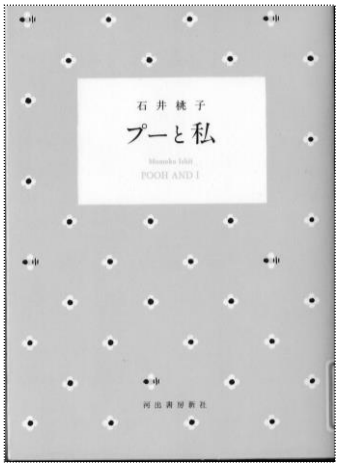



## 『ゾウの鼻が長いわけ』ラドヤード・キプリング／作　岩波書店　2014.1

ゾウくんは何でも知りたがる年頃でした。いつも周りにいるお父さんやお母さん、おじさんなどに尋ねては、答えを教えてもらえないばかりか、邪険にされ、ピシャリピシャリとからだを打たれていました。ある日、ワニは何を食べるのか知りたくなったゾウくんはワニがいるというリンポポ川に向かいます。ワニが実は危険な生き物だと知らないゾウくんは、ワニに話しかけます。そして、ワニはその大口で答えを教えようとしますが…。果たして、ゾウの鼻が長いわけとは何でしょう。

英語圏で初めてノーベル文学賞を受賞した作家の手による短編集で、標題の他、全部で１２篇が収められています。その１２篇では、動物の特徴、手紙やアルファベットの由来をユーモアたっぷりに、親しみやすく語っています。

## 『プーと私』石井桃子／著　河出書房新書　2014.1




児童文学界で、作家・翻訳家として活躍した著者ですが、本書は、『家と庭と犬とねこ』『みがけば光る』に続くシリーズ３作目で、これまでに単行本で読めなかった未収録の随筆を中心に、３８篇が収められています。「プー」、「ピーターラビット」「ドリトル先生」など、私たちがよく知っている作品についてのエピソードの他、アメリカの子ども図書館や海外児童図書の出版事情について書いてあります。例えば、「ドリトル先生」の章では、著者のヒュー・ロフティングと日本語訳を頼んだ井伏鱒二について語っています。ロフティングはもともと鉄道の技師で、子どもに宛てた絵手紙がドリトル先生のもとになっていること、また、井伏鱒二は、翻訳するのに四苦八苦したことなど、彼女でしか知り得ない意外なエピソードも書かれています。それぞれの作品への思い入れがよく伝わってくる本です。

## 『大草原の小さな家』ウィリアム・T．アンダーソン／文　求龍堂　2013.11

ローラ・インガルス・ワイルダーは、１８７０年から１８８０年のアメリカの開拓時代に大草原で暮らした喜びや苦しみを「小さな家」シリーズで書き表しました。１９３２年から書き始め、シリーズは7作まで続きました。その中でもみんながよく知っているのは『大草原の小さな家』ではないでしょうか。日本でもテレビで繰り返し放映されました。本書は、「小さな家」の物語にそって、家族の姿や暮らしを当時の美しい写真と文章で紹介しています。本書の初版は１９８８年であり、今回の増補改訂版では、ローラの物語が日本の読者にどのようにして伝えられたのか、また、ローラ本人と実際に文通をしていた日本人とその直筆の手紙を追加紹介しています。戦後、アメリカの支配下にあり、大変だった日本人にローラの作品がどれだけの勇気と希望を与えたか、手紙から感じ取ることができます。巻末には、「小さな家」シリーズの関連書籍やインガルス一家の年表、そして、実際にローラのふるさとへ行ってみたい人のための情報が掲載されています。本書を見終えると、ローラの作品を読みたくなるのではないでしょうか。